

平成 28 年 8 月 14 日

V I A X 児童部会

平成 29 年度 第 2 回「お話（素話）を学ぶ」報告書

1. 日 時 平成 29 年 7 月 21 日（金）14：00～16：00
2. 場 所 ヴィアックス研修センター（鳩山ビル 6F）
3. 参加者 19 名
4. 配布資料 ①第 2 回児童部会次第
②第 1 回児童部会議事録
5. 課題図書 『レクチャーブックス お話入門 1 お話とは』
松岡享子／著 東京子ども図書館 2009 年（新装改訂版）
6. 内 容
 - (1) 事務局より、以下の点について説明があった
 - ① 「お話を学ぶ」（お話（素話）についての知識を深める）（お話（素話）を語る力と、聞く力を育てる）について
 - ② 前回の『お話とは』について
 - (2) A～E の班に分かれ、参考図書 p 38～p 49（「考える力」まで）を読んで話し合い、発表を行った。以下、各グループの発表内容である。

A 班

- ・ お話を聞く力
- ・ テレビを楽しむこととお話を楽しむことには違いがある。テレビから受ける刺激は受動的、お話を楽しむのは能動的。
- ・ お話を聞くと考える力が育まれる。原因と結果をつなげて考える。
- ・ お話に慣れている子は、素話を聞くと先を想像して楽しみ、含み笑いをしたりする。
- ・ メディアで加工されたお話は知っていても、お話の原作を知らない子がいる。原作へと導いていく必要がある。

B 班

- ・ お話は楽しむもの。教育的な効果を主目的とするものではないが、想像しながらお話を聞くことで想像力が養われ、結果的に教育的な効果が生まれる。
- ・ ディズニーアニメは他者とイメージを共有可能。自分で想像できる世界とどちらが楽しいか。
- ・ お話を聞くことに慣れていない子に対しては、『おおきなかぶ』や『三びきのやぎのがらがらどん』のように繰り返しのあるお話が有効。

C 班

- ・ テレビの視聴を避けることはできないが、自分で想像する力は育てていかなければいけない。
- ・ お話に慣れても、慣れたところに離れていってしまう。
- ・ 初めて聞く子にも心に残るものがあるはず。

D 班

- ・ テレビとは違うお話の良さを知っておけば、利用者からの疑問に対しても説明できる。
- ・ 子どもは経験からイメージをふくらませていく。
- ・ 小学校へ読み聞かせに行くと、お話に慣れていなくて話の筋を楽しめない子が混じっている。

E 班

- ・ テレビにはテレビの良さがあると思うが、楽しみ方は受動的。
- ・ お話を聞く事は能動的。自分の想像力を駆使して楽しむ。
- ・ 絵本に慣れると段々お話も楽しめるようになる。年齢に合わせて楽しむ。
- ・ ディズニーの結末と昔話の結末は違うので、知らないでいるのは勿体ない。
- ・ お話の中には難しい言葉も出てくるが、知る楽しみがある。

(3) 部会員による語りの時間

- ① 『おんちよろちよろ』 発表者：K (T 市立図書館 A 分館)
- ② 『瓜こひめこ』 発表者：U (T 市立図書館 T 分館)

(4) A～E の班に分かれ、参考図書 p 50～p 57 (「そぼくなコミュニケーションを！」まで) を読んで話し合い、発表を行った。以下、各グループの発表内容である。

A 班

- ・ テレビ(映像)は、サブの登場人物に外れて本筋に戻れない。
- ・ 知的訓練の足りない子には、繰り返しのあるお話が優れている。
- ・ ラジオ等の刺激は受動的。話が止まらないので、話のスピードについていけないと楽しめない。
- ・ 大好きな人から聞く物語は子どもにとって宝物。
- ・ 児童館や小学校等の場所で子どもへ声掛けをしていくと、語り手への信頼感が芽生える。

B 班

- ・ お話の方が物語の核心に気づきやすい。
- ・ お話には、その場所で語り聞かせるライブ感がある。
- ・ 生身の声で話してもらえると充実感が増す。
- ・ 声優がお話を読んだテープ等は、お話よりも声優のキャラの方が目立ってしまう場合がある。

C 班

- ・ テレビ（映像）は情報量が多く、注意力散漫になってしまう。
- ・ 映像があると、可愛い絵やリアルな絵等、絵の雰囲気や印象が左右されてしまう。
- ・ お話は自分で想像し作り上げるもの。
- ・ 初対面の人からより、身近な人から聞いた方が良い。
- ・ 図書館の人からまた聞きたい、と信頼してもらえるような関係を築いていきたい。

D 班

- ・ 耳で聴くと、文字だけの本より入りやすい。
- ・ 絵があると、自分の想像した絵と違う時がある。
- ・ お話には自分で想像する楽しさがある。
- ・ 絵本の筋ではなく細部に注目して立ち止まったり、絵本を通じたコミュニケーションを楽しむのは親子の間でなら良い。
- ・ 語り手への親しみから新しいコミュニケーションが生まれる。

E 班

- ・ テレビだと余計な情報があってお話の筋に関係ないものに視点がそらされ、集中できない。
- ・ 語り手と聞き手の間の信頼関係が大切。
- ・ お話を楽しんでいる子どもの反応に、語り手も励まされる。
- ・ 語り手に親しみがあると、図書館で探したい本がある時など、子どもは声をかけやすくなる。
- ・ 語り手への興味は、お話への興味や、図書館サービスの広がりにつながる。

(5) まとめ

- ・ “耳から聞く読書”の経験を積んでいない子は、なかなか本を読むことができない。経験を積んでいる子は、お話の本筋が見えるので自分1人でお話を読んだ時も筋を追うことができる。
- ・ また、挿絵がなくても場面を想像することができる。絵に助けられてばかりいると、文字だけの本を読んだ時に絵を想像するのが難しくなる。
- ・ 人間同士の生のコミュニケーションを通して赤ちゃんは言葉を獲得していく。
- ・ 一人で本を読むことができるためにも、耳で聴くお話はとても大事である。図書館員はそういったお話の重要性を頭に入れて上で利用者に接していくことが大事である。

7. 所感

- ・ テレビ等の映像情報が溢れる中で、何故“耳から聞く読書”であるお話（素話）が大事なのか、その重要性を再確認することができた。これから部会を通して学んでいく中で、お話（素話）への理解を深め、その良さを利用者へ伝えていけるよう努力していきたい。